

松葉屋通信

vol.28
2014.5.15

創業1833年の松葉屋。

「直し、繕い、使う」

私たちは、生きた木を切り命を与えられ
「もの」をつくり出す。

そんな中で生まれたひとつのテーマが

「直し、繕い、使う」こと。

大切な思い入れのあるものが汚れたり、傷ついたり、
何かの拍子に壊れてしまったことが

誰でも経験があると思います。

もと通りに直すということは難しいかもしれない。

でももと通りの、それ以上に魅力的なものに

生まれ変わらせる方法があるかもしれない。

そんな希望をもって、

金継きんぎの世界に脚を踏み入れることにしました。



【器の準備】

・かけたり、割れたりしてしまった器は、油分が残っていると漆がつきにくいのでよく洗浄して、乾かしておく。

今回は4月、松葉屋のスタッフそれぞれの直したい、割れたり欠けてしまった大切な器を持ち寄って兼ねてから親交のある漆作家「飯塚直人さん」のもとへ弟子入り覚悟で訪れたその様子をご紹介します。

割れたり、欠けたりした器を見ながら、誰からともなくその器の思いで話が始まります。

「このお皿は、何を入れるにもちょうどよかったです。」

「親子丼も、カレーも……」

「これは陶芸をやっている友達がつくってプレゼントしてくれたんだ」

「すごく深くていい色をしていて気に入って買ったの」などなど……

その中には、松葉屋おなじみのあの湯のみも。見事にまっふたつ。

さて、この思いで深き器たちがどんな姿に生まれ変わってくれるのでしょうか。

金継の行程をご紹介します。

【金継の行程】

●欠けた器の金継



生漆



筆とヘラ

①下塗り



小さな筆を使って、器の欠けた部分になるべくはみ出さないように生漆を塗る。
※油葉のかかっている器は、はみ出ると汚くなってしまいますので丁寧に行う。

②漆を乾かす



湿度 20%以上 80%以下の環境下で漆が乾くので、湿度調整を行っている室に入れて乾かす。
※漆は空気中の水分と反応して乾きます。およそ、1日半で乾きます。

〈準備するもの〉

- ・生漆
 - ・小さい筆
- 漆で固まらないように、油をしみ込ませているのでテレピン油をかけて油分を拭き取ってから使う。

1日目の作業は終了。
使った筆は固まらないように、サラダ油で洗う。次回は、乾いた箇所にはパテを使って肉盛りをしていく。

● 割れた器の金継



〈準備するもの〉

- ・生漆
- ・小麦粉(どんなものでもよい)
- ・竹箸
- ・漆を練るためのヘラ

② 竹箸を使って、
麦漆を割れた断面に乘せて
伸ばしながら塗る



③ 全ての割れた箇所
に
麦漆を塗ったら、
破片を合わせる



両手でぎゅっと破片同士をなじませるように、隙間に麦漆が入り込むように押さえる。合わせたところから、マスキングテープを貼って固定していく。

④ 欠けと同様に湿度管理をされた
室に入れて1ヶ月くらい乾燥させる。

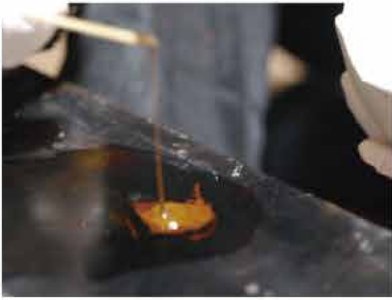


「時間がかかるんですよ」

と、事前に飯塚さんから聞いていたものの、ここまで1歩1歩、地道に行う作業だとは思っていませんでした。今回は、ここまで。今後も修復の様子は1歩1歩お伝えしていこうと思っています。どうか気長にお付き合いください。

① 麦漆をつくる

生漆に3割程度の小麦粉を混ぜ、よく練る
どんだん練っていくと粘り気が出てくる



飯塚直人(プロフィール)

1976新潟県生まれ。
2004年 渡辺 裕之氏(新潟県三条市)、2006年 菅原 利彦氏に、漆を学ぶ。
2008年 帰郷し、木工を始める。新潟県上越市在住





てのひらや素足で、きもちよさには
しゃいだり、じっくりとしみじみと
感じ入る姿があちこちに。



いろんな出会いのあった2014春のギャッベ展、楽しかったです。

今回撮影してくださったのは、松葉屋の常連さんでもある小柴尊昭さん。

仲よし家族の和気あいあいぶりや、初夏の松葉屋のひとコマ、スタッフの素の表情をナイスショットしてくれました。ポーズをとる場面でも緊張する間もなく、いつのまにか、表情のゆるんだいい写真を撮ってくれていて、感激しました！



松葉屋通信 vol.28

発行所 松葉屋家具店+くらし道具学研究所

〒380-0841
長野市大門町45
TEL 026-232-2346
FAX 026-237-4558
since1833@matubaya-kagu.com
(水曜定休)

発行日 2014年5月15日

©松葉屋家具店+くらし道具学研究所
Copyright ©2010 Matubayakaguten Co., Ltd.
All rights reserved.

